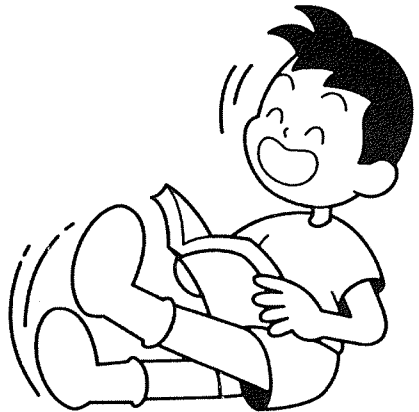


子どもに伝えたい

滋賀のむかしばなし



滋賀県地域婦人団体連合会

もくじ

〈大津・湖南〉

おなべさん

(大津市・仰木の里学区)

膳所城(石鹿城)の由来

(大津市・)

埋められたみこし

(大津市・瀬田学区)

鬼になったお坊さま

(大津市・石山学区)

竜宮池(石山寺山内)

(大津市・石山学区)

荒痛薬師堂

(大津市・石山学区)

富川の彦治と源吾(大石の義民)

(大津市・大石学区)

万年寺の御好し狸

(栗東市)

でんづるぐる(田鶴来)

(中主町)

三上山のムカデたいじ

(野洲町)

〈甲賀〉

櫛野寺の観音さんとれんげ草

(甲賀町)

大蟹と僧都

(土山町)

お地藏さんを射った清兵衛さん

(甲南町)

池が原の大蛇

(甲南町)

おやくしさんのドンジョ汁じゅう

(信楽町)

〈湖東南〉

伊崎の竿とびいさき さお

(近江八幡市)

お沢さんさわ

(八日市市)

清水地蔵しみずじぞう (水呑地蔵)

(八日市市)

願成寺の人魚がんじょうじ にんぎょ (由来)

(蒲生町)

日野菜の由来ひのな ゆらい

(日野町)

比良の八荒ひら はっこう

(竜王町)

惟喬親王これたかしんのう

(永源寺町)

〈湖東北〉

お鐘が淵の由来かね ふち ゆらい

(愛東町)

ぼいとこせ

(愛東町)

矢取地蔵やとりじぞう

(秦荘町)

下之郷のおたけさんしものごう

(甲良町)

〈湖北〉

源哲さんとタヌキ

(長浜市)

三島池のはたの音

(山東町)

へんじょうが岩屋

(伊吹町)

峠の地藏さん

(米原町)

おとら池の伝説

(米原町)

坂田金時考

(近江町)

寝牛の大岩

(浅井町)

虎御前と虎姫

(虎姫町)

権兵衛穴のはなし

(湖北町)

島つなぎ

(びわ町)

ひとばしら

(高月町)

白鳥伝説と大音糸

(木之本町)

天女の羽衣

(余呉町)

堀止地藏

(西浅井町)

〈湖西〉

白王権現

(朽木村)

大津・湖南ブロック

大津市

「おなべさん」

「膳所城（石鹿城）の由来」

「埋められたみこし」

「鬼になったお坊さま」

「竜宮池」

「荒痛薬師堂」

「富川の彦治と源吾」

栗東市

「万年寺の御好し狸」

中主町

「でんづるぐる（田鶴来）」

野洲町

「三上山のムカデたいじ」

おなべさん（大津市民話）

むかし、むかし藤尾の村に徳兵衛さんという地主さんがおられました。その徳兵衛さんの家には、「おなべさん」と呼ばれる女中さんがいました。

ある年の五月、雨がぜんぜん降らないので、田んぼがひび割れて、村の人たちは、田植えができないと困っていました。そこで、おなべさんは、「わたしが竜神さまに雨を降らせてくださいとおねがいに行ってくださいましよう。」といって山の方へ走っていきました。

しばらくすると、にわかにくろい雲がむくむくとできて、みるみるうちに空いちめんに広がって暗くなり、やがて大つぶの雨がポツリポツリ降りだしてきました。やがて、滝のようにザーザー降ってきました。

村の人たちは、外にでておたがいの手を取りあい、とびあがって「これで田植えができる」と大喜びしました。

けれども、いつまでたっても、おなべさんは帰ってきませんでした。そこで、徳兵衛さんは、山の中を「おなべやあーい、おなべやあーい」とあっちこっちさがしまわりました。やがて、山の上にある池のふちにたどりつくと、おなべさんの変わりはてた姿を見つけました。おなべさんは、命がけで、竜神さまに雨ごいをしました。

村の人たちは、このことを忘れないように、小さな「ほこら」を建て、おなべさんをまつりました。

今では、このみ公園の中に、かわいい姿のおなべさんのせきひが建っています。



膳所城（石鹿城）の由来

膳所城は六万石のお城でありました。

このお城には十万石以上のお城でないとゆるされない外ほりや四本のあしをもつ中大手門があり、幕府へみっこくした者がありました。

そこで、しらべるために幕府からのおつかいがやってきました。膳所はんのお殿さまのめいれいで朝はやくから、幕府のおつかいがつく前に、瀬田口のそう門から中大手門へゆく道に、おおきな石をおき、犬の血をぬったむしろをかけ、けらいに見はり番をさせて、家老がそう門で幕府のおつかいをでむかえました。やがてあわづの松なみ木みちからそう門についたおつかいに「じつは、けさほど山から大きな鹿が一頭城下にまぎれこみ、あばれましたので、うちころしました。おとりの道が血でよごされておりますので、こちらの方から案内いたします」といって、浜ごてんから、南大手門をとおりの二の丸ごてんへと案内し、たいへんなごちそうでおもてなしをして、北大手門から大津の本陣までお見送りをしました。

四本のあしをもつ中大手門をさけて通りました。

そして、外ほりをみっこくしたのは、新堀川のことだったので、問題にはなりませんでした。

幕府のおつかいの方は、おだやかなお人からであったため、うすうすさっしておられたようでしたが、なにもいわずに京都所司代に膳所城のかまえにはなにも問題がないとほうこくしました。

おかげで、幕府からはなんのおとがめもなく、ぶじにすみました。

そして、鹿のかわりになった石（石の鹿）が膳所はんのききをすくったとして、それいらい、膳所城を石鹿城ともいうようになったと伝えられています。

今ある「石鹿太鼓」の名前も、ここからきています。

(戸田耕吉氏)

埋められたみこし

大津市神領には、建部大社があります。このおやしろは、一一七〇年あまりも前から、ここにまつられており、戦前は近江一之宮として、みんなからあがめられていました。今も多くの人たちがお参りをして、にぎわっています。

神社の南の方は、大津―信楽線が走っていますが、神社から出てきた道と県道の交わるところにいい伝えられている場所があります。今は標識もありません。

四十六年前には、そこに一本の大きな榎の木がありました。この木があるために、道路は狭められ自動車も片側通行でした。榎のまわりの土は、けずり取られて榎だけが片側に立っているという姿でした。それでも木は元気で二、三人の子供が手をまわさなければならぬほど太い大きな木でした。いくつものこぶや穴があいており、蟻などが出たり入ったりしていました。

この榎の木の下にはみこしが埋められているといい伝えがあります。それは、むかし神領のみこしと大萱（瀬田北区）のみこしがけんかして、神領のみこしが負けてここに埋められたということです。

その榎の木も昭和二十八年の春に切られ、道路になりました。それ以来、その木のことも、みこしのこともいわれなくなりしました。

ところが、十数年たってから、この場所は、「えんき」という地名で、建部大社と関わりがあり、この榎は記念に植えられたものといわれています。

九世紀のはじめ、醍醐天皇の時に、全国の神社を調査させた「延喜式神名帳」の中に、建部大社の名があります。この榎の木はこれを記念して植えられ、その後ずっと植えつがれて来たものでしょう。

掘り起こされたことのないこの地下に、伝えられているみこしが埋まっているのかもしれない。（横田高和氏）

鬼おにになつたお坊ぼうさま

むかし、石山寺いしやまでらに朗澄律師ろうちようりつしという名前なまえで、呼ばれているえらいお坊ぼうさまがおられました。

このお坊ぼうさまは、なんでもできるたいへん頭の良かたいお方かたで、石山寺いしやまでらをもちたてたお方かたとして、あがめられていました。このお坊ぼうさまが、死ぬしぬときに「自分じぶんは仏教ぶつぎょうの教おしえを守まもり、人々ひとびとのしあわせをねがい青鬼あおおにの姿すがたとなつてみまもつていくことを約束やくそくします」といってお亡なくなりになりました。

そののち、お弟子でしの行宴ぎやうえんというお坊ぼうさまが、亡なくなられたお坊ぼうさまの姿すがたをさがして、いっしょうけんめいにお祈いのりをしていたところ、ある晩ばん、ゆめの中でお姿すがたをあらわされました。

目がさめて、急いそいでゆめに見た場所ばしょへかけつけてみると、松まつの木の枝えだに髪かみをさか立てて、あたりを見わたしているこわい鬼おにの姿すがたになつたお坊ぼうさまが約束やくそくしたようにひとびとを見守みまもってくださつたということです。

毎年まいとし六月ろくがつに朗澄律師ろうちようりつしのお徳とくをしのび、ひとびとのしあわせをねがって青鬼あおおにまつりがとりおこなわれています。ジャンボ青鬼さんもんが石山寺山門いしやまでらにかざられ、地元じもとの人たちによって「青鬼おどり」が奉納ほうのうされています。



竜宮池（石山寺山内）

石山寺の参道をまっすぐに進み、本堂へ上る石段のところを左手の奥の方へすすむと、しょうぶの花がきれいに咲く無憂園という名前の庭園があります。さらに、もっと奥へすすむと「八大竜王」とかかれた額があがっている赤い鳥居があります。

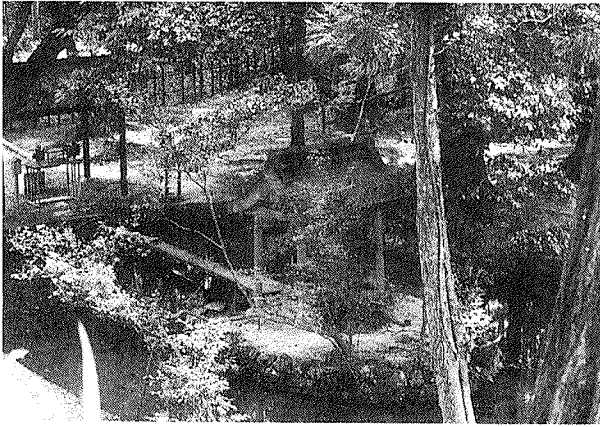
この鳥居のむこうに池があり、池のまん中にお社がまつられています。

むかし、歴海という和尚さんが、この池のあぜにある丸い石の上で、お経をとなえました。

お経の中にかかれています八つの竜の名前をよみあげると、ざわざわと水の音がして、池の中からつぎつぎと竜王があらわれ、和尚さんの前に、かしこまって並びました。

このことがあって、この池のことを「竜穴の池」というのがほんとうの名前ですが、みんなからは、「竜王池」と呼ばれました。

雨がふらない干ばつの夏に、雨がふるように、雨乞いをすれば、かならず雨がふったといわれています。



荒痛薬師堂

京阪電車の終点、石山寺駅の西がわの小高いところにお堂があります。「石山寺別所 荒痛薬師如来」という石ひょうがたっています。

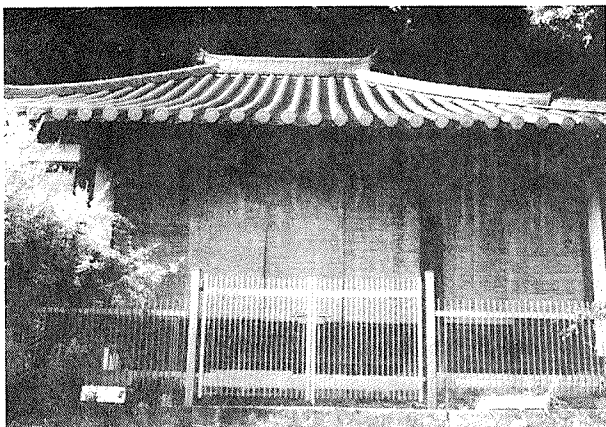
正応三年三月（一九二〇年）のころ、りょう師が瀬田川に舟をうかべて、あみを引きあげようとしたとき、あまりの重さに川に引きこまれそうになりました。「しめた！大きな魚がかかった」とよろこびました。

しかし、それは大きな石で、「あーあー」とがっかりしました。

でも、よく見ると、形がと石にいたので、家へもって帰りました。さっそく持って帰ったと石で、自分の手おのをといでいると、なんと石が、「あ痛や、あ痛や」となき声をあげたので、びっくりしました。

りょう師はおどろいて、よくよく調べてみると、薬師如来のお姿がきざまれています。

今では秘仏として三十三年に一度石山寺の観音様のご開帳にあわせて公開されています。



富川の彦治と源吾（大石の義民）

彦治は富川村の庄屋さんで、源吾は、その弟でした。

大石というところは、四方山にかこまれ畑が少なく、村の人達は薪を作ったり、炭をやいたり、木をひいたりしてくらしをたてていました。

瀬田川は、流れがゆるやかで岩石が出ていて、舟の運搬にはむいていませんでした。

大石にある五つの村からの薪や炭や材木の運搬は、大石の関所がある沢野峠をこえて、牛や馬、そして人の肩を使つて関の津村の浜へ出て、大津や京都へ運びました。

関の津の浜には、お代官がおられて、荷を運ぶ牛や馬一頭にいくらかの税金をとり、みんなあわせて銀一貫五百匁を毎年おさめさせられ、他に通行税として牛や馬それぞれ一頭に六文おさめさせていました。

また、その上に浜へ入るためのお金もとりたてて、村の人の負担はたいへんなものでした。

そこで、村の人たちは、なんでも領主の戸田さまにうったえました。しかし、そのたびに、村の人たちのおもいはつぶされて、上へ通じませんでした。

一ヶ月に六度だけ、税金のかからない日があり、この日は前の夜から峠のふもとに長いれつができるほどでした。

山ですむ人達のくらしは、たいへん苦しいものでした。そのため、ときには村の人達が竹やりやむしろをたてて旗にして、いっききを計画しましたが、彦治兄弟は、しばらく様子をみようと思ひなをなだめました。

慶長十八年（一六一三）十一月、近江へ幕府からのみまわりのお使いがきました。

やっとその時がきたと彦治兄弟は、うったえ状をふところに入れ幕府のお使い役に近づこうとしますが、警戒がきびしくて近づけません。ようやく鈴鹿峠で村人たちの困っている様子をしたためた書状をさし出すことができました。

その頃は、直接ちよくせつうったえ出ることは、法律ほうりつでは許ゆるされていませんでした。うったえ状じようを直接ちよくせつ手わたすという二人のおもいはかなえられましたが、しかし、法ほうをおかした罪つみによって、慶長十九年二月二十四日彦治と源吾の兄弟けんご きょうだいは、佐馬野峠さまのとうげで、はりつけになりました。

そして、五月二十日になって、領主りようしゆの戸田さまは、大石の五つの村に対して、長い間の牛や馬、人々たひに対しての通行税つうこうぜいをとることをやめ、今いままでのひどいとりたてをあらためて、村の人達ひとたちを安心あんしんさせました。

富川町とみかわちようの往生寺おうじようじ境内けいだいに、一つの古い石碑せきひがあります。これには、二人の戒名かいみょうがほられ、うらに、慶長十九年二月二十四日けいちようとするされ、富川村とみかわむら、東村あづまむら、淀村よどむら、大石中村おおいしなかむら、龍門村りゅうもんむらの庄屋しやうやさんによって建てられたことがしるされています。

それから、毎年命日まいねんめいじちには、みんな仕事を休やすんで兄弟きょうだいの勇氣ゆうきある行動こうどうをしのび、まつりごとをしていましたが、明治めいじになってとりやめとなりました。

しかし、大正八年村の人達ひとたちは、彦治ひこじ、源吾兄弟げんごきょうだいの立派な行動こうどうをのちの世よまで長く伝つたえるために、沢野峠さわのとうげに記念碑きねんひを建てました。それから、毎年二月二十四日往生寺おうじようじの墓前ほぜんで、「大石義民祭おおいしぎみんさい」が行おこわれています。

大石義民のうた

一、村すくいし その功こう

我大石われのかがみぞと

とわにつたえし いしぶみや

よみてなかざる 人はなし

二、佐馬野さまのに立ちて そのかみを

しのぶ我等われらは 世のために

つくさんことを ちかうべし

神かみのみ心こころ 胸むねにして

(かつて、大石小学校の唱歌しょうかとして、うたわれていた。)

万年寺の御好し狸

むかし、上砥山という所に、寅さんと呼ばれる大工がいました。寅さんは、大の動物好きで、家にいるねずみに米粒をやったというぐらいです。また、こどもが山猿を捕まえてくると、かわいそうにと、山へ逃がしてやったそうです。

むかしのことですから、いまのように道路も舗装されておらず、車ももちろんのことありませんでした。仕事に出かけるにも歩いて行きました。寅さんは、仕事に出かけるときは、いつも手原に出ました。

その手原に出るには、小野山という山を歩いていかなければなりません。小野山を歩いていく途中に、万年寺というお寺がありました。

ある雪のちがつく寒い冬のことです。寅さんは仕事先で酒をよばれてきました。寅さんは酒が好きで、飲んで家へ帰る途中で眠り込んでしまったりして、その日寅さんが小野山の万年寺にいったのも、もう夜もすっかり更けたころでした。

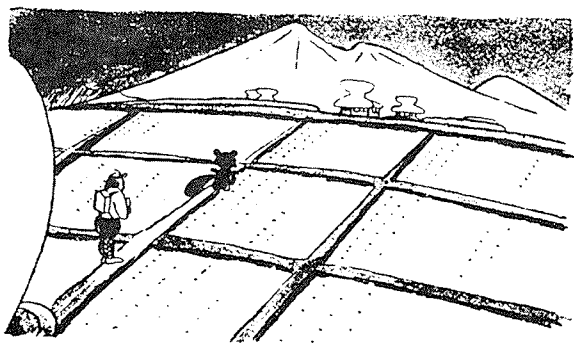
万年寺について寅さんは、寺の石碑の前でつい眠り込んでしまいました。しばらく眠り込んでいると、誰かが寅さんの名前を呼ぶのです。

「寅さん、寅さん、起きなさい。こんな所で眠りこんでいるとカゼをひきますよ」

眠りから覚めた寅さんが見たのは、一匹のたぬきでした。

「なんや、たぬきかいな。私に何か用事か。もう少しここで寝させてくれ」といって、寅さんは、再び眠り込んでしまいました。

「寅さん、こんなところで眠り込んでしまうと凍えて死んでしまいますよ。私がお家まで送りますから起きてください」



あまりにうるさくいうたぬきに、眠りから覚さまされた寅とらさんはびっくりしました。どうしたことでしょう。いままで闇やみにつつまれていた小野山から家に向かう道が、くっきりと浮かんでいるのです。そして、その道を、一匹のたぬきが寅とらさんを案内しながら歩いているのです。

次の日、小野山や上砥山かみとやま一面は銀世界でした。家で目を醒さました寅とらさんは、昨夜、自分がどうして家についたのか、はっきり覚えていませんでした。

その日から寅とらさんは、一滴の酒もやめたそうです。

そのためきは、酒を飲んで万まん年寺ねんじで眠り込んでいる人々を家まで案内したそうです。人々は、そのためきを、「万まん年寺ねんじの御好およしたぬき」とよんだそうです。

(宮城定一郎氏)

でんづるぐる (田鶴来)

むかしむかし、野田というところに、かめ吉というひやくしようがいました。かめ吉は村一ばんの力もちでよく働きました。しかし、弓をひくことがたいへん上手で、生きものををみつけては、うち落とし、その小さいのちを大切にしないのが欠点でした。

妻のお松は、心のやさしい信心ぶかい人でした。お松は「生きものを殺すのはやめてください」と手を合わせてたのむのでしたが、かめ吉はどうしても弓をはなしませんでした。

今日も一羽のつるをうち落して、よろこび勇んでかえってきました。

「まあ、かわいそうに……。あら、首がないわ」

「あほ、おれの腕がじょうたつしたんじゃ。とんでいるつるのあの細い首をめがけて、いとめるぐらい上手になったんだ。

アハハハハ」

と得意になつてはなしました。

「おねがいだから、殺すようなかわいそうなことはやめて。」と泣くようにたのみました。

お松は子どもが生まれたら、かめ吉が生きものを殺すようなことは、しなくなるのではと考え、まい日氏神さまへ子どもがさずかりますようにお百度まいりしておねがいをしました。

かめ吉は、お松が氏神さまへおまいりするのには、おれの弓がおれるようにおねがいでいるにちがないと考えると、むきになって、まい日弓をもって、びわ湖の水辺に鳥をさがしてあるいていました。

あれから一年がたつて、去年つるを殺した場所のちかくで、一羽のつるが舞っているのをみつけました。つるは低く、また高く円をかいて美しくとんでいました。

かめ吉は「しめた」と弓に矢をあてまんまるのお月さんのようにいっばいに引いて、ヒューッとはなすと、つるの羽根にあたりました。「やったー」とつるに近づきもち上げたたん「あつッ」とさげんで、かめ吉はびっくりしてとんぼがえりをしながら地面に落ちました。かめ吉のふとももからドクドクと血がふきだしていました。かめ吉は痛みをこらえながら、手にもったつるを見ると、羽のわきに、何かをぬいつけたように、はさみこんでいるものがあります。かめ吉は、おそろおそろ手にもっている、つるの首をよく見ると、去年うちとったおすのつるの首でした。このめすづるは、夫のつるの首を一年間も大切にまもっていたのです。そして一周忌にあたる今日、そのたましいをなくさめるために、こうして飛んでいたのです。

かめ吉はしょんぼりと、びっこをひきながら家にもどってきました。

「まあ、このつるの羽のあいだに、つるの首が……。あれほど生きものを殺すことはやめてくださいと、おねがいでいたのに」

かめ吉は

「わるかった、わるかった。つるでさえも、こんなに夫婦の深い愛情があったのに……。わるかった、わるかった」とこうかいの涙を流すのでした。

かめ吉とお松の夫婦は、心をこめて、つるの夫婦を家の庭のかたすみうめて、あの世でのしあわせをお祈りしました。やがて、かめ吉とお松のあいだには、まるまるとふとったたくましい男の子が生まれ、もも太郎のように育てました。それからのかめ吉は、生きものを殺すことをやめ、子どもとお松を大切に、たのしい日を送りました。

今でも、野田の里には、一町五反ほどの大きさのその場所を「でんづるぐる」とよんでいます。お松の信心は、今でもびわこの水辺近くの豊田のひとびとに受けつがれています。

(中主町文献「豊積の顔」より)

三上山のムカデたいじ

むかしむかし俵藤太という強い人がいやはったんや。

あるとき、瀬田の橋の上に、橋を通る人をじゃましているもんがいるというのを聞いて、俵藤太が行ってみやはったんや。そうしたら、橋の上にはいたのは、いがい大蛇なんや。目玉をキラキラさして、二十丈（約六十メートル）もあるほどの大蛇が横たわっていたんや。

こんなもん見たら、だれかて、きもつ玉をつぶして、その場にたおれてしまふのに、俵藤太は、ちっともこわがらんと、大蛇の背中の上をどんどんふんで、橋をわたってしもたんや。大蛇かて、何もせんとじっとしていたんや。

そのときは、それですんだんやけど、その晩、俵藤太のとまっている宿へ、ひとりの美しい女の人がたずねてきたんや。俵藤太が、「こんな晩に、何かあるんですかい。」

と聞かはると、女の人は小さな声で、

「わたしは、きょう、瀬田の橋の上にはいた大蛇です。わたしは、大むかしから、近江のうみに住んでいますが、人間には見られないようにしていました。ところが、三上山にムカデが出て、けだものやさかなを食いちらし、わたしまでけらいにしようとならっています。だから、なんとかムカデをやっつけようと思ひますが、わたしでは歯がたちません。そこで、強い人がいないかと思ひて待っていたのです。ぜひ、お力をおかしくください。そして、三上山のムカデを、どうぞやっつけてください。」

「今夜のうちに、その敵をほろぼしてやろう。」

ていわはったら、それを聞いて女の人は、喜んで姿を消してしまわはったのや。

俵藤太は、約そくを守ってすぐ、刀と弓と矢を持って瀬田へかけつけはったんや。そこから三上山を見やはったら、三上山は、

いなびかりがひっきりなしにしているんや。さては、ばけもんが来るなと待っていやはると、だんだん雨風がきつうなってくるんや。そして、なん千もの雷を集めたくらい、いがい音がしてきたんや。そのおそろしいことは、口ではいえないほどやった。きつと、三上山にいるムカデが、ばかもんになっていたんやな。

けど、俵藤太はふるえもせんと、じつと三上山の方をにらんでいたんや。そして、矢を放つはなつのによいところまで、ばけもんが来るのを待ってたんや。ちょうどよいくらいになったとき、一本めの矢を放たはったんやけど、鉄の板にでもあたったように、はね返りよったんや。二本めも同じで、少しもからだにささらへん。

矢は三本しか持ってなかつたんや。二本ともうまくいかへんので、三本めには、つばをつけ、心をしずめて、ねらいをつけはったんや。ありったけの力で矢を放つと、今度は、あたった手ごたえがあつたのや。

すると、あのいがい音も、いなびかりも、いっぺんにやんでしまったんや。そして、目の前にいがいムカデがいたんや。矢はどの下までささっていたんや。三本めの矢にはつばをつけていたさかい、つばのおかげで通ったんやな。つばはムカデの毒やからな。

そして、俵藤太は、ムカデをずたずたに切りすてて、湖へ流してしまわはったんや。

あくる朝、女の人がまた来やはったんや。前の日は、小さい声やったのに、今度は、はればれした声で、お礼をいわはったんや。そして、

「恩返しおんのしようもありません。せめて、わたしの持っているものでも持って行ってください。」
というて、絹きぬのきれとたわらとなべ一つをおいていかはったんや。

俵藤太は、女の人からもろた絹きぬのめので着物をつくったんや。けど、いくらつくっても、そのぬのは少しもへらんのや。米のたわらからは、いくらでも米が出るし、なべは、なんぼでもほしいものが出てきて、しまいに（終わり）ならへんかったんや。ふしぎなことやったということや。



甲賀ブロック

甲賀町

「櫛野寺の観音さんとれんげ草」

土山町

「大蟹と僧都」

甲南町

「お地藏さんを射った清兵衛さん」

甲南町

「池が原の大蛇」

信楽町

「おやくしさんのドンジョ汁」

櫟野寺の観音さんと「れんげ」草

むかしむかし、大和の国の長谷の観音さん（長谷寺）で、西国中の観音さまが集まって西国の札所のことや、その順位を決めるための寄合いがありましたそうな。

櫟野の観音さんも、その通知をもらわれて出かけることになりましたそうな。朝も暗いうち、七つ前（午前四時半すぎ）から脚絆、わらじをつけ、尻まくりの出で立ちで、伊賀から笠置越えで、道中二晩も仮枕のまま、遠い道をてくてく、きばって歩き続けられましたそうや。春もたけなわ、もってこいの陽気でしたが汗を拭きふき峠をおりて、やっと大和路にさしかからはったとき、はるか霞の中になんともきれいな絵景色が開けて見えたんですって。身は浮きうき、心は晴れやか、いきおい足早になり、だんだん近づいていかはると、みごと、どっちむいてもあたり一面、れんげの花盛りではありませんか。

「きれいなもんじゃ。こんな広びろとした田畑一面咲いてるれんげ、見たことないわい。実にみごとなもんじゃ。」

観音さんは驚嘆の余り、そこを動くのを案定忘れてしまわはって、どっかり畦に腰をおろして一服の何ので、ただもう見惚れてばかりござったうちに時間がたつてしまいました。

「これはいかん。たいへん。たいへん。」

とあわてて長谷寺さんに着かれました。ところが早や門が閉ざされてしもうていて、いくら門を叩いても、どこへ廻っておがってみても開けてもらえず、とうとう中に入ることは出来なんだやそうです。なんせ着かはったんが遅そすぎたんですね。西国一番那智、二番紀三井寺…というあんばいに、そのときすでに事は



中で決まってしまうていたのですな。

「ああ、惜しいことをした。残念、無念。せっかくこうして苦勞して大和くんだりまでもやってきたのに。」
観音さんは悔しくて、悔しくてたまりません。

「すべて終ってしまうたんでは参加せなんだとおなじことになってしまった。西国の札所にも入れてもらえず、番付もあたらなんだちゆことや。いくら自業自得やいうても、ああ、ああ。」
と観音さんは、えろう嘆か合ったそうです。

「憎いれんげめ。よし、こうなったら、わが在所にはれんげを咲かさんぞ。こんりんざい咲かさんぞ。」
以来、櫟野の里にはれんげの花が咲かない。道端にも一本もないちゆことです。

「観音さんは、何とえらいもんや。」

近郷近在の衆は偉大なみ仏のご威光あらたかなることを今も信じ、厚う信仰しておられるそうです。

(中島克明氏)

大蟹と僧都

むかし、むかし、鈴鹿の山に、どこからか、身長三メートル以上もある怪物のような大きな蟹がやってきました。そして鈴鹿の山に住みついて、旅人はもちろん山の麓の村の人たちを襲っては食べるようになり、霧を吹き、風を起こして暴れまわる大蟹が怖くなった村人は住まいを捨てて逃げ去り、いつもは人の通る道にも誰も通らなくなりました。

そんなことが百年近くも続きましたが、誰もこの大蟹を退治するものがいませんでした。

これは大変だと思われた観音様は、その頃京の都の偉いお坊さんの夢の中で『あなたがやっつけるように』と命令されました。

この僧都という偉いお坊さんは、夢の中で言われたように鈴鹿に行き、蟹坂にやってきました。その時大蟹は獲物を逃さないようにじっとお坊さんを狙っていました。

大蟹が飛び掛かろうとした時、お坊さんは静かにお経を唱え始めました。すると不思議なことに、大蟹はその場へたと倒れてしまいました。目だけが怒ってギラギラと光っていましたが、大蟹はどうしても足を動かさませんでした。

お坊さんが一生懸命に仏様のお話をしていると、大蟹はぼろぼろ涙を流し苦しみながら自分のやって来た悪いことを心から反省しているように見えました。

そのとき、突然雷が落ちたと思えるような物凄い音がしたかとおもうと、蟹の甲羅が八つに割れ、血が噴水のように吹き出し、大蟹はすぐに溶けてしまいました。

こうして百年の間人々を苦しめてきた大蟹は観音様を信じたお坊さんの力でやつつけられました。村の人たちは、喜んで村に戻り、お坊さんが本当に偉い人だと言いましたが、お坊さんは答えないで、あたりに散らばった蟹の甲羅を集めて

埋め、その印に墓をたて、村人に『反省したのだから、優しく丁寧に墓にお墓に入れてあげなさい』と行って立ち去ったそうです。それが今も残っている蟹塚です。また、今も作られている『蟹が坂飴』は、大蟹の八つに割れた甲羅と同じ形の飴を作ったものだと言われています。

(土山町歴史民俗資料館資料より)



かにが坂飴

蟹の甲羅に似たその形は、退治された鈴鹿山中の化け蟹の慰霊のために作り始められたといわれ、今でも田村神社厄除祭や道の駅で売られています。

お地藏さんを射った清兵衛さん

むかし、といってもまだ百年になるかならないかというころのことである。清兵衛さんという人がいた。このお年寄り
は、お百姓であったが、夏になると川へ行って魚を採ったり冬になると狩をしたりして暮らしていた。

冬のある日、山へ狩に行った。まだ昼間なのに、昼まえから妙に疲れた感じがする。ちよっと一服しようかなと腰をお
ろすと急に眠くなってくる。おかしいなと思っていると、自分の腰をおろしている崖の上に一匹のきつねがいて、後足で、
パッパッと砂を蹴っている。きつねが砂を蹴るたびに清兵衛さんはウトウトと眠りたくなるのである。

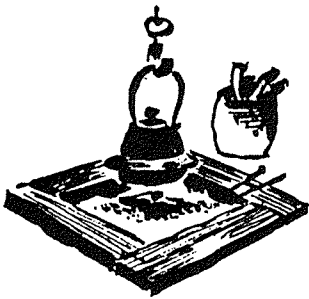
いつの間にか寝てしまった清兵衛さんが目をさましたのは、しばらくしてからであった。「俺が眠ってしまったのは、
あのきつねのせいだな。ようし、あのきつねをこの鉄砲でしとめてやろう」

と立ち上がった。あたりにきつねの足跡がついている。その足跡をたよって山の奥へ入って行くと、ずっと向こうにきつ
ねらしいものが見えた。

「ここにいたのか。ようし」

と、ねらいを定めて一発ズドンと射った。確かな手ごたえを感じた清兵衛さんは、きつねがたおれた丘の上へとんで
行った。しかし、そこで清兵衛さんの見たものはきつねではなく、小さな石の地藏さんであった。
そして、そのお地藏さんの額のどまん中に、鉄砲のたまがくい込んでいるのだった。

「これは大変なことをした」と清兵衛さんはびっくり仰天した。「これまで、山へ行って、け
ものを殺したりして殺生をしてきたが、お地藏さんは、そういうことを止めさせようとされたの
だ」こう考えた清兵衛さんは、それからは一さいの殺生をやめ、本業の百姓に精を出したという。



池が原の大蛇

むかし、甲賀の里に大きな湖がありました。その湖は、周囲を杉の大木におおわれ満々と水をたたえていました。この湖に、いつのころからか大蛇がすみついておりました。大蛇はときどき姿を現わしては村びとの生活をおびやかすので、人びとは安心してくらすことができませんでした。

村びとはいく度となく寄り合いを開き相談しました。けれどなかなかよい知恵がうかばず、とうとう朝廷にたのむことにしました。

そこで朝廷から修理太夫繁保というものが、この村に遣わされました。繁保は数人の部下をつれて森の中へ進みました。そのとき、にわかにかきくもり、大あらしとなりました。湖面は大きく波だち、どこからともなく黒雲がわきあがり、雷雨とともに大蛇が姿を現わし、繁保の一行におそいかかりました。

一行はにわかのことにおどろき、にげまどい、ちりぢりばらになっちゃいました。必死の思いでにげまどう繁保の前に、小さなやしろがみえました。そのとき、繁保の心の中に「神にいのる」という考えがうかび、繁保はそのやしろの前で一心にいのりました。

すると、あらしは次第におさまり、大蛇はもがきながら、湖の中に姿を消してしまいました。あたりはもとの静けさになりました。繁保は、ばらばらになった一行を集めると、小さなやしろの前で一心に祈りはじめました。大蛇退治は神にいのるより他はないと考えたからです。

十七日目の明け方近いころ、繁保は今までの疲れから、いつしか眠りに落ちてしまいました。

夢の中で湖があらわれ、ほとりの杉のこずえが急に光りかがやいたのです。天空から池にむかって、無数の矢が黄金色にかがやきながら、雨のように降りそそぐのでした。

次の瞬間、湖に大波がたったかと思うと、大蛇が姿をあらわし、身をくねらせて苦しみながら大空にむかって昇っていたのでした。

繁保は、ふとわれにかえり、あたりをみまわしますと、ついさきほどまで青あおと水をたたえていた湖はいつのまにか姿を消し、小さな池に変わっているのです。そしてその池の中央には、三本の矢が突きささっており、日の光を浴びてかがやいているのでした。

村びとたちは、池の中央にほこらを建てて、矢川神社と名付けて、三本の矢をその神社の宝物としました。そして、その湖のあとは「池が原」とよばれる美田になりました。

おやくしさんのドンジョ汁

村はずれのみこし休みの近くにあったかごまさはんという家に宮大工をしている一人の旅人が立ちより、

「何んともあ、村中灯の消えたような、一体どうしたことか。村中わるい病気で困っていなさるのか。それなら、どじょう汁がよい。お薬師さんの薬と思っただけなさい。」

「それから、今、お宮さん参りをして来たが、お薬師さんがお宮の本殿の中に宿借りしてござる。さぞ肩身のせまい思いにちがいない。別にお堂を建てなさい」

と色々いって、いつの間にか立ち去りました

人々は、いわれたように、どじょう汁を食べてみると病気はまもなく全快しました。村の人達は、

「これは、きっと、薬師如来さまのおつげだ」

といって、あくる年からは、お薬師さんの日には、村中で、どじょう汁をいただくこととなりました。

お薬師さまの薬汁に幸福を祈りながら、九月八日の江田薬師には、かならずどじょう汁を村中の人達が食べる習わしとなりました。

湖東南ブロック

近江八幡市 「伊崎の竿とび」

八日市市 「お沢さん」

八日市市 「清水地蔵（水呑地蔵）」

蒲生町 「願成寺の人魚（由来）」

日野町 「日野菜の由来」

竜王町 「比良の八荒」

永源寺町 「惟喬親王」

伊崎の竿とび

宮ヶ浜の国民休暇村から、更に奥に入った伊崎というところにお寺があります。

むかしは、竹生島も伊崎も天台宗の修行の場でありました。竹生島には役小角（七世紀末）が修業したといういい伝えがあり、伊崎寺を開いたのも役小角と伝えられています。役小角は鬼神を思うままにつかいこなし、空中飛行もできたという修験道の開祖です。

伊崎寺の本尊（まん中に安置されて重んじられている仏さま）は相応和尚（八三一―九一八）が作られた不動尊三体のうちの一体と伝えられています。

相応和尚は、天台宗の回峯行をはじめた偉いお坊さんです。比叡山の北にある葛川の滝で修業されている時に、滝つぼに不動明王があらわれたので、思わず滝つぼにとびこみ抱きあげて石の上に安置してみると、ただの木でありましたが、この木で三体の不動明王をつくられました。そのうちの一体が伊崎寺にあります。

本堂の前の岩角に、大きな船の帆柱のような、長い材木が、湖の水面に平行してつき出しています。

この材木の上から下を見ると、目がくらみそうになります。

毎年八月一日にこの材木の上から湖にとびこむ「竿とび」という行事があります。

近くに住む若者が集まり、たくさんのお見物人を前に、腕前を見せるのですから勇ましいものです。一人ずつ竿の先に行き、そこからとびこむのですが、ある者は逆立ちをしてから、ある者は竿の先につけられた鍔に、一人も三人もぶらさがって湖にとびこむ姿はいさましいかぎりです。

この「竿とび」の行事の起こりは、相応和尚が、新しいお寺を建てるために、資金集めに、湖を通る船からお金や品物の寄付をもとめたことが始まりでした。

材木の先に鉢をひもでぶらさげて、通る船からほどこされたお米やお金を入れた鉢が、しぜんに岸へかえってくる「飛鉢の法」をひらきました。船で通る人々はよるこんでお金やお米を鉢に入れ、ほどこしをすることで、嵐にあわないと信じていましたから、たくさんのお米やお金が集まりました。

それからは、船からのほどこしを受けると、お寺では竿から湖にとびこんだり、水中にもぐったりして人を喜ばせる行事をするようになりました。

今では、夏にはなくてはならない楽しい行事となり京阪神方面からもたくさんの見物客がこられます。

お沢さん

日照り続きで雨が降らない年になり、びわ湖の水は基準となる水面から、五十センチも低くなりました。水不足の年は、米を作るお百姓にとっては、「お沢さん」が命の水です。この「お沢さん」へおまいりして水をいただかないと「お米がとれなくなる」と昔は近くの村々から大勢の人たちがおまいりに来たものです。

「お沢さん」というのは、蒲生、神崎の「水の神さま」で「御沢神社」といい、八日市市平田地区の上平木町にあります。この「お沢信仰」は、奈良時代からありました。聖徳太子が、この「お沢さん」のまつられているここで、かんぶつ会（四月八日おしゃかさんのお誕生日を祝ってあま茶をそそぐ花まつり）をおこなわれ、田んぼ用の水の水源になるよう池を掘られ、そのおかげで農作物ができるようになり、神さまがまつられました。

水の神さまは、「竜神さま」ですが、「お沢さん」には、八大竜王が神さまとしておまつりされています。

竜神さまのお住まいは、三つの池で、「白水池」「すみの池」「にごり池」に、それぞれお住まいになり、水不足で困っているお百姓に雨のめぐみをあたえているのです。

「白水とにごり」の二つの池には、「女の竜神さまがお住まいになり、「すみ池」にお住まいの男の竜神さまに気にいられようといっしょうけんめいにお化粧をし、そのお白粉のために池の水がにごっているのだ」といういい伝えがあります。

この三つの池におまいりすると「きつと大雨がふり、水がいただける」と信じられ、昔はたくさんの人たちが、おまいりしたといわれています。

清水地蔵（水呑地蔵）

むかし、聖徳太子が大坂にある四天王寺の瓦を焼くために白鹿山（今の瓦屋寺）のふもとをお選びになり浜野沢の土を取られた時、土の中から石のお地ぞうさまが出てきました。このお地ぞうさまを山の上でおまつりしました。ところがふしぎなことに、石のお地ぞうさまの前からすんだきれいな水がわき出ていました。

さて、お話は江戸時代へさかのぼります。この白鹿山のふもとにそって、旧街道かくねくねとまがっていました。これは、五個荘、能登川からつながっている伊勢街道であり、今の栄町かどを通っています。

ある日、旅商人の若者がふる里のお母さんが病気でねていることをきいて、いそいで帰るとちゅうあまり急いだので、ハアハアといき苦しくなって、「どこかでお水がほしい」と思い、ふと見るとこのお地ぞうさんが目につきました。そばに小さなお家があって、その前にうつくしい女の人が立っていました。若ものは「お母さんが病気でちょっとでも早く家へ帰りたいと思って走るように早あしで来ましたので、どうぞお水をませて下さい」といって、お地蔵さんの前の清水をすくっていただきました。すると、娘さんが「この清水をのむと病気はすぐに治るといわれています。このひょうたんに、お水を入れて持って帰り、お母さんにのませてあげてください。」といました。若者は、よろこんでお礼をいってお水もらって帰りました。病気のお母さんに、のませたら、ふしぎにも、病気が治りました。

若者はよろこんで、ありがたいことだと感謝して、また、旅に出ました。そしてお地蔵さまにお礼をいうために、瓦屋寺にやって来ました。お地蔵さまと清水は、こんこんと湧き出ておりましたが、美しい娘さんもお家も影もかたちもありませんでした。ふしぎなことだと若者はおもいながら、又、清水をすくってのみました。そして商いの旅をつづけました。その後この水は旅人ののどをうるおすばかりか、水がかれてしまう時期にも、こんこんと湧き出て、近くの人たちをたすけ、「清水地蔵」と名づけられ、人々から、あがめられています。

願成寺の人魚（由来）

川合の願成寺の尼寺には、それはそれは目をみはるほど美しい尼さまがおられました。毎日、三丁ほど離れた本寺の願成寺へおてつだいに通われていました。

心のやさしい、かがやくばかりの美しい尼さまは、だれからも好かれていましたが、いつの頃からか、かわいいお小姓さんが、どこからともなくやって来て、尼さまのお供をするようになりました。

イキイキとたのしげに働く尼さまの後には、いつもお小姓さまがつききりで、お手伝いをする姿に、はじめのうちは、ほほえましく思っていた村の人達も、だんだんとうらやましくなり、「どこのお方だろう」とか「どうして毎日通って来るのだろう」といい出して、ついには「どうやら、尼さまをおしたいにちがいない」と噂をし、仏さまにおつかえの身の尼さまは、たいへんお困りになりました。

ある日、寺ぎむらい（格式の高いお寺につかえ、寺務をとったお侍のこと）が、こっそりと後をつけると、寺村という在所にある佐久良川の川ぶちの青々とした水たまりへすつと消えて行きました。おどろいた寺侍の急ぎの知らせに、村の人達は、網を投げてからめました。捕えてみれば「魚であって、魚でなく」「人であって、人ではなく」かわいそうな人魚の姿であったそうです。

動物の身でありながら、尼さまをしたい、困らせた人魚をこらしめるために、とうとう「ミイラ」にされてしまったそうです。

世にもふしぎな動物として、大名や豪商（大きな商いをする人）の手にわたり、見せ物になって伝わっていったそうです。

ところが、夜になると「しくしくと泣き、大きな声、小さな声」で止むでもなく、消えるでもなく、家中に聞こえ、だ

んだんと恐こわくなってきました。

たまりかねた人ひと達は、人魚にんぎょの生うまれた土地ちへ帰かえしてあげようと、今は亡なき尼あまさまの眠ねむる願がん成じょう寺じへ帰かえって来きました。

遠とほい遠とほい、長ながい長ながい旅たびでした。朝あさに、夕ゆふに、お経きょうの聞きこえる観かん音おん堂どうで、観かん世ぜ音おん菩ぼ薩さつのやさしいお心こころに包つつまれて、今は静しずかに眠ねむっています。

日野菜の由来

今の音羽の城山の上に、蒲生家のお城である音羽城が建っていた頃です。だから今からおよそ四百五十年ほどの昔になります。

音羽の城主蒲生貞秀というお殿様が、ある秋の日、山へ狩を兼ねて今の鎌掛谷にある石楠花谷のあたりにあった観音堂へ、お詣りに行かれました。その道の途中です。

「おや！色の美しい草じゃ。まるで菜のようじゃないか。」

馬の上から、ふと赤味を帯びた山草を見掛けた殿様は、家臣にその草を丁寧に掘らせて城中へ持って帰りました。

「うーん珍しい草じゃ。蕪のような形をして土中に入っている部分が白いと！：食べられるかもしれないぞ。」

一つ畑で栽培してみよう：：ということになり、翌年の春に種を採り、大切にそれを育ててみました。その年の秋、家来たちが一生懸命に作った甲斐があつて、それはそれは美しいおいしそうな菜が育ちました。

「どうしたら食べられるだろうか：？」

いろいろの料理を試みましたが、漬物にするのが一番最適とわかりました。漬物の味はこれまでに無い風雅な味のあるものとなり、その色もほのと紅色に染まりました。その美しいこと。殿様の喜びようはこの上ありません。

「いい味じゃ。いい色じゃ。これは漬物用の菜として作れ。」

と、城中の畑に翌年はまた沢山栽培されることになりました。その年、城主の貞秀は、かねてから連歌の友として交友のあった都の公卿飛鳥井雅親卿へ、この珍しい菜の漬物を贈りました。すると雅親も大麥珍らしがって時の天子さまである後柏原天皇へ献上いたしました。天皇さまも大麥よろこばれ雅親を通じて蒲生貞秀のもとへ、一首の和歌を贈ってこられました。

近江なる松物の里の桜漬これぞ小春のしるしなるらむ

松物というのは日野谷の古称です。このお歌によって漬物は桜漬と呼ばれるようになり、それ以後蒲生氏領内の百姓たちが広く栽培し、日野谷で作る菜だから誰言うとなく『日野菜』と言うようになりました。その後貞秀から四代目の蒲生氏郷の代になって氏郷は伊勢の松阪へ国替えになり更に更に会津若松へ移り、その孫蒲生忠知は伊予の国の松山へと移りました。殿様の国替えに従って多くの武士や町人も移り住み故郷の味を忘れることができず、日野菜の種を持って行ってそれぞれの土地で栽培いたしました。それが今、伊勢と伊予にも栽培される日野菜だと言われます。ただし伊予松山周辺で作られるものは「緋の蕪」と言われ、日野の日野菜とは形も違い、日野周辺で言う『きそ菜』に似た紅色の蕪です。会津あたりは火山灰土質の関係で栽培されません。…こうして約三百数十年間、日野の特産品として家々で日野菜が作られてまいりました。ところが形がどうも無恰好でもう一つ商品価値として思わしくありません。明治時代の中頃、なんとかもつと美しいおいしい商品価値の高いものが作れないかと、村井の吉村源兵衛さんが日野菜の改良に打ちこみ、毎年毎年少しづつ良い親種を採って、遂に今のような美しいすなりとした日野菜を作り出すことに成功いたしました。…日野町の特産品日野菜。生みの親は蒲生貞秀という殿様。育ての親は吉村源兵衛さんです。

比良の八荒



むかし、三上山の麓ふもとにある鏡村かがみむらに、おまんという大変器量きりょうの良い娘が住んでいました。あの年のこと。豊作を祝って行われる奉納相撲ほうのうずもうに出るために、比良からはるばる八荒という力士がやって来ました。

その八荒の身体は、どの力士よりも一段と大きく、もこもこと盛り上った腕の筋肉や、黒ぐろと胸毛がはえたあたりは、見た目も強そうでした。

年ごろのおまんは、八荒を一目見るなり、心を奪うばわれてしまいました。

相撲もすみ、八荒が比良に帰ったあとも、おまんの八荒への想いは、日ごとにつのり、その心を抑え切れずに、とうとう今浜(守山市)から盃たらいの船をこいで比良に向かって行きました。そして、

「どうかお嫁にして下さい」

と頼むのですが、八荒は、おまんの心も知らず、追い返してしまうのでした。それでもおまんはあきらめず、毎日毎日通いました。

八荒は、そんなおまんがうとましくなり、

「それほど、わしのことを思うてくれるなら、今日から百日、毎晩通うて来るなら、わしの嫁にしてやろう」

と、こんな約束をしてしまいました。それを聞いたおまんは大層喜び、それからというもの、雨の日も風の日も一日として休むことなく、行きは比良の灯笼とうろうを目あてに、帰りは鏡山の灯笼

を目あてに通い続けました。そして、ついに九十九日目、おまんはきょうこそは八荒の嫁にしてもらえると、心も軽く比良に向かって行きました。

ところが八荒は、この広い湖を女の方で、一夜にして通うおまんは魔性に違いないと恐ろしくなり、おまんが目あてにしている比良の山の灯籠の灯りを吹き消してしまいました。突然明りを消されたおまんは、たちまち方角を失ってしまいました。真暗闇の湖上をさまよう盃たらいの船は、見る見る間に波にのまれ、湖の底深く沈んでしまいました。

ちょうど、三月二十日の夜のことでした。翌日、今浜の岸に、盃の船は打ち上げられ、その横に、おまんの櫛くしをくわえた大きな蛇が横たわっていたということです。おまんの八荒への想いが恨みうらみとなって、蛇に化身けしんしたかのようなのです。

いまもそのころになると強い風が吹き、湖がひどく荒れます。それを、比良の八荒荒れじまいと呼んでいます。

(後藤大宣氏)

惟喬親王

むかし、文徳天皇の第一皇子に惟喬親王という方がおられました。そのお母さまは、二流の貴族の娘静子という人でした。

しかし、その頃は藤原氏が一番の力をもっていた時代で、第四皇子惟仁親王のお母さんは、摂政太政大臣（天皇が小さいので、かわって国をおさめる人）藤原良房の娘染殿皇后明子という人でした。そのため良房は惟喬親王をさしおいて、自分の娘のうんだ惟仁親王を皇太子にし、わずか九才で清和天皇になりました。

惟喬天皇は皇后の子供ではないが、父君文徳天皇に深く可愛がられ、和歌や詩をよくされる一流の文化人でしたが、都の権力あらいからのがれ、京の北にある小野の里で静かにくらされました。たびたび在原業平のお見舞を受けられましたが、藤原一族の追手をさけ、水無瀬や奈良の渚院をあちこちとさまよい歩かれました。

さらに、遠くに落ちのびようと母方の領地がある近江をめざして藤原実秀、堀川中納言ら数人のおともをつれて小野の里を出られました。

西江州（今の湖西）から舟でびわ湖をわたり、近江八幡の宮が浜に上陸され、そこから愛知川ぞいに上流にむかって歩いて岸本におつきになりました。そこで聖徳太子をおまつりする太子堂で一夜のお宿をとられました。そして、又山の中をふかく入られて小椋の集落におつきになりました。

むかし、千手姫がひるも夜も法華経をとえ続けたといわれる日本コバの岩屋で、夜をあかし、つぎの朝実秀に小椋のみようじを与えられました。

こうして、この小椋谷いちめんをお歩きになり、山でくらす人々とともに、山林を開いて畑にする計画や物を作りくらしをたてることを考えられました。ろくろを使って木をひかせ、食器、おわん、しゃくしや盆をつくる技術を教えられ、

田畑をひらき、木を植え、道をつくり橋をかけるなどの新しい村づくりについて教えられました。蛭谷 君ヶ畑 政所にのこる遺跡は、惟喬親王を先祖の神として千年もの間うやまわれ、まつられています。

親王は自分の運命としてお坊さんになり、素覚と名をあらため、算延とも呼ばれました。

また、弟君の清和天皇は九才で天皇になられたが、ご成長されてからは、惟喬親王の運の悪さを知りたいへんなやまれ、兄君に天皇の位をおかえししようと思われたり、また生活費をふやそうとされましたが、親王は天皇につかえるものであり、お坊さんの身でありますからとおことわりになるなど、美しいご兄弟の気持ちでつよくむすばれ、しかも、天皇とつかえる者であることをよく知っておられました。

惟喬親王がお伝えになられたるころは、唐から技術が入ってきて、平安時代になってから、漆器(うるしぬりのうつわ)づくりに使われるようになり、木地(もくめ)づくりの技術は発達しましたが、もとは平地(たいらな土地)の技術でした。

そのために、材料の木が少なくなって山の方へうつらなければならなくなっていった時だけに、古い木がたくさんある小椋の集落は、とてもよい土地でした。

ろくろで作られた製品は、はじめは宮廷(天皇がおられるところ)でつかわれ、しだいに神社やお寺で使われるようになり、貴族の生活にとっても、なくてはならないものとなり、ついには、一般の人々も使い、たいへん流行して木地師(作る人)も多くなり、その技術をならいに来る人もふえ、筒井に千軒、小椋に千軒、藤川に千軒などといわれるくらい、小椋谷には、ろくろの音がひびきました。

材料となる木が少なくなって来て朝廷の助けを受けて、日本の国のどこの山でも、自由に木を切ることができるようになって、木地師たちは東は東北、西は四国、山陰、九州へと行きました。

惟喬親王は、小椋谷の人達から「親王さん」と、今も親しみとほこりをもってしたわれながら呼ばれています。

湖東北ブロック

愛東町

「お鐘が淵の由来」

愛東町

「ぼいとこせ」

秦荘町

「矢取地蔵」

甲良町

「下之郷のおたけさん」

お鐘かねが淵ふちの由来ゆらい

むかし、むかし、大萩の横根の山の山頂で、行基上人ぎょうぎが行ぎょうをしておられました。ある時、山を下って谷川のあたりを通られますと、一天にわかにかき曇って、雷神の怒り物ものずこ凄く、しのつく雨で夜になったかと思われました。行基上人は、手にした鐘を打ちならして一心に念仏しましたが、雷も雨も烈しくなるばかりでした。

上人はなおも仏を念じながら、手に持った鐘を谷川の深い淵に投げこんで、一心不乱に印を結びますと、ふしぎなことに、大雷雨は見る見るうちに止んで、青空さえも見えてきました。上人はこの淵にいる魔性まじょうのものの仕業しわざとあって、大事な鐘を投げ与えたのでありました。それからこの淵をお鐘が淵というようになり、昔から雨乞いをする場になっています。

大萩のお宮には、九社の神様がお祀りしてありますが、その一社におかねや様という神があります。毎日毎日日照りが続き、田に入れる水は枯れてしまった旱魃かんばつに、田は亀の甲のように割れて、待てども待てども雨が降らず、どうすることもできない年に、このおかねや様の御神体（鰐口）を、字の神主が、おかねが淵まで移して、岩の上に祀ります。字民は総出で鐘と太鼓で、「ドンドトブチャケ」とはやしながら、一週間雨を下さるよう祈願します。おじいさんの話では、七日間の祈願の終日に一天にわかにかきくもり、大雷と共に待望の大夕立がしたということでした。

（村山菊治氏）



ぼいとこせ

むかし、むかし、この地に大変仲のよい夫婦がありました。

お婿さんが、お嫁さんの里へ招かれて、だんごをよばれて戻られたそうです。

「まあ、これは、おいしいおいしいものを頂いたものだ。早く帰ってこの事を話そう」

と、「だんご、だんご」と口ずさみながら、家路を急ぎました。村境の川までくると「ぼいとこせ」と飛んだその途端、よばれただんごのことをすっかり忘れてしまい、どうした事か「ぼいとこせ、ぼいとこせ」と口ずさみながら戻っていると、

「きょうは、おいしいおいしい『ぼいとこせ』をよばれてきた。うちでも作ってくれないか」

といわれるのですが、お嫁さんには、なにのことかさっぱり見当がつかみません。ふとみると、川を飛んでころんだはずみにできたのか、お婿さんの額にコブができていました。これは変なこと、お嫁さんはそのときはっと気づいて、「わからん、わからん」というお婿さんに、

「こういうものかな」

と、額のコブをなでてみると、

「あー、そうそう、『だんご』のことやった」

といって、二人でおお笑いされたということです。

(真永はま氏)

矢取地藏

岩倉に安置されてある矢取地藏とは、もとは東山の東部にある小字上の堂というところにあつたらしい。

平諸道の父は武勇にすぐれていたがある年早づがあつて、水争いからとなり村の高橋将監の父子数百人がにわかにならめ寄せて来た。諸道の方は手兵はわずか六人程が身近にいただけでどうすることも出来ない。しかたなく地藏菩薩に祈願をして戦いの場を見ると小法師が敵味方の中を走りまわって矢を拾って味方に与え諸道の父に渡す。その矢がすべて敵にあたり死傷が多く後退して、ようやく敵を追い払いあやういところをまぬがれた。

諸道の父は非常に喜んでお礼参りをしたところ、上蓮という僧が「昨日の戦いにお祈りのためお堂に香華を供え、一寸外へ出た間に地藏様がなくなっていた。盗まれたのかと近くを探したが見つからない。夕方お堂へ来てみると、地藏様がいて、お顔に黒羽の矢を受けておられる。これは昨日の戦いに矢を拾って渡していた小法師がこの地藏様の化身に違いない。」と話した。諸道の父はねんごろに矢きずのある地藏にお礼を申し、随喜の涙を流して感激した。

ある夜のこと、小法師が諸道の枕辺に立ち「自分は何も望まないが、安孫子の郷の中で一番景色のよいところにつしてくれ。」と告げたので、岩倉山にお堂を建て、この地藏を安置して矢取りの地藏といった。(安孫子の郷とは、松尾寺、斧磨、岩倉、竹原、西出、東出、常安寺、円城寺、深草の九字をいう。)



下之郷のおたけさん

むかし、むかし、戦国時代の世に観音寺山にお城がありました。織田信長の焼きうちにあい、女や子供たちが北の方へ北の方へと逃げておちのびてきました。

そして、疲れはてて下之郷の地に住みつくようになりましたが、なんせせんさくがきびしく、敵の目にとまり、次々と自害をしました。無念なことです。

時代は移り変わり、明治の初め、桂城神社の神主がある夜、夢を見ました。夢の中で、「私はたけと申すものですが、無念な最期をとげました。どうぞこの村に私を祀ってください」

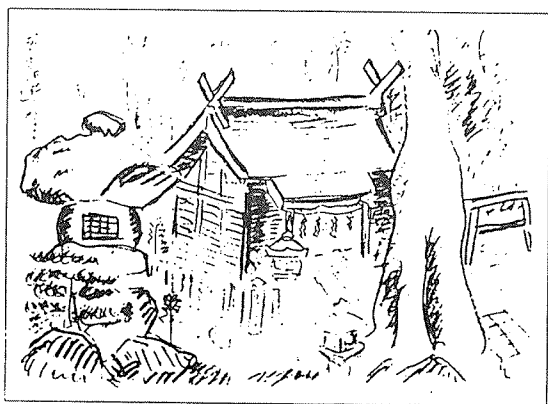
といわれました。夢からさめた神主は、村人に相談しましたが、聞き入れられません。した。

ところが、それ以後大火がおこり、明治八年には焼死人が続出しました。それから、火がつきにくい時には「下之郷、おたけさん、おたけさん」というと火がパツとつくようになるくらい、下之郷の火事は多かつたそうです。

これは、おたけさんのたたりである。と村人たちは思いこみ、明治二十二年おたけさんを桂城神社境内に五十告神社として祀るようになりました。

おたけさん祭りとして四月三十日と九月三十日に行われ、むかしはにぎわったものです。現在は九月三十日を中心に三日間お祭りをされています。

しかし、いまの世でも火事ほどおそろしいものはありません。



湖北ブロック

長浜市

「源哲さんとタヌキ」

山東町

「三島池のはたの音」

伊吹町

「へんじょうが岩屋」

米原町

「峠の地蔵さん」

「おとら池の伝説」

近江町

「坂田金時考」

浅井町

「寝牛の大岩」

虎姫町

「虎御前と虎姫」

湖北町

「権兵衛穴のはなし」

びわ町

「島つなぎ」

高月町

「ひとばしら」

木之本町

「白鳥伝説と大音糸」

余呉町

「天女の羽衣」

西浅井町

「堀止地蔵」

源哲さんとタヌキ

長浜の堀部という部落のうしろに、小さな山がある。

江戸時代のおわりころ、この山の中腹に屯覚寺というお寺があって、そのはなれに源哲さんという男の人がすんでいたんや。

源哲さんは、長崎で医術や算術を勉強してきた学者やった。

けど、源哲さんはちっとも学者らしいない。日ごろのようすや、かわったふるまいを見て、村人たちは、かげでこんなうわさをした。

「なあ、お寺の源哲さんて、ほんまに長崎で学問をしてきた人かいな。」

「そうやな、いつも昼間からお酒をのんでごろごろしてはるな。それに、子どもといっしょにあそんでばかりいて、いつ学問してはるのやろ。」

村人たちがこんなことをいうのもむりあらへん。源哲さんが勉強するのは、いつも夜中やったから。

源哲さんは、子どもたちに人気があった。とてもやさしいし、おもしろいあそびをいろいろ知っていた。まい日、いっしょにお寺の境内であそんだり、山の中にでかけたりした。

雨の日にはそとへでられへん。源哲さんは、本堂でやさしいよみかきをおしえはじめた。

それがいつのまにか、日をきめて、よみかきやそろばんをおしえるようになった。

源哲さんはおもしろおかしくおしえるので、子どもたちは、たのしみながらよみかきをおぼえていったんや。

村じゅうの子どもがあつまって、お寺の本堂は、ほんまにぎやかやった。

そんなある日のことや。源哲さんが本堂にはいっていくと、見なれぬふたりの子どもをとりかこんで、村の子どもがさ



わいでいた。

「おい、おまえら、どこの部落からきたんや。」

「だまってたらわからんやろ、いえよ。」

「源哲さんのゆるしをもらわんと、ここにきたらあかんぞ。」

男の子と女の子は、みんなにせめられて小さくなっていった。

源哲さんもはじめて見る子どもやったが、ほかの子どもにこういった。

「こらこら、よその子をいじめたらあかん。そのふたりはな、わしがよう知ってる子どもや。きょうからみんなといっしょに手ならいすることになったんやから、なかようせえ。」

「なあんや、源哲さんの知ってる子か。」

「それやったら、はようそういえばええのに。」

子どもたちはしずかになった。

いじめられていたふたりは、ほっとしたようすやった。ふたりは熱心で、その日から一日もやすまずかよってきた。

(それにしても、いったいどこの子どもやろ。)

源哲さんには、いつまでたってもわからなかった。

つめたい雨がふる晩のことや。

源哲さんは、はなれでうらめしそうに、からのとっくりをふっていた。

「あーあ、酒がなくなってしまうのに気がつかんかった。こんな雨の夜に、となりの部落まで酒をかいにいく気にはなれんしなあ。」

そのとき、トントンと雨戸をたたく音がした。

(いまごろ、だれがきたんや。)

あけてみると、このまえ、村の子にいじめられていた男の子と女の子が立っていた。男の子は大きなとっくりをさしだした。中には酒がいっぱいはいっている。

「こんなものをどうしたんや。」

源哲さんは、おどろいたりうれしがったり。

「雨がふったときは、わしらが源哲さんのかわりに酒を買いにいったるわ。」

ふたりはにっこりわらい、雨の中をはしっていった。

源哲さんは、おもいとっくりをぶらさげたまま、あつげにとられて立っていた。

それからは、雨がふると、ふたりの子どもはとなりの部落へいって、酒を買ってきてくれたんやて。

ふしぎやなあ、とおもった酒屋の主人がある晩あとをつけてみると、ふたりは七尾山へかえっていった。ふたりは七尾

山のタヌキやった。

源哲さんのひょうばんは、七尾山のほうにもきこえて、タヌキたちもよみかきをならおうとやってきたんやな。そのおれいに、タヌキたちは雨の日に酒を買いにいって、役をひきうけてくれたんや。

源哲さんは、中曽根源哲というて、びわ町曾根出身の人。医術や算術のほかに、天文学にもすぐれた人で、村いちばんたかいお寺のやねにのぼって、ひと晩じゅう星や月のうごきをしらべることあつたそうや。堀部には、源哲屋敷のあとがのこっている。



三島池のはたの音

むかし、琵琶湖の東の村を、佐々木のおやかたさまがおさめておられた。そのおやしきに、比夜叉御前という名まえの、はた織りのじょうずな乳母がいたそうな。

トントンカラリン トンカラリン

すんだうつくしい音が、風にのって村のすみずみまでひびいていた。

さて、この村に三島池という池があった。まい年、春になって山やまの雪がとけると、池は水がいっぱいになる。村の人びとは、この水をわけあって、米ややさいをつくってくらしていたので、それはそれは三島池をたいせつにしておったそうな。

ところが、ある年の春のこと、どうしたわけか、池の水がへりはじめた。そうして、みんなのねがいをうらぎって、とうとう池の水は、からっぽになってしまった。

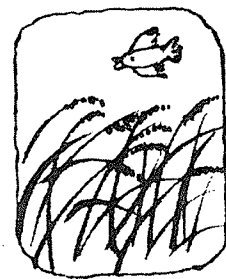
「水がのうては、田うえはできんぞ。」

「やさいもかれてしまうぞ。」

村のもののこまりようは、ひとかたではない。

おやかたさまも、ずいぶんしんぱいなさった。水の道をしらべて、こわれたところはなおした。山の木をしらべて、すくないところには木をうえ、おおすぎるところはきりたおした。よいとおもうことは、あれもこれもやってみた。池の神さまにいのつてもみた。

けれども、夏がすぎて、よその田んぼの稲穂が金色に色づくころになっても、三島池には水がなかった。水のない村の田んぼからは、とうとうひとつぶの米もとれなんだ。



それでも村の人は、またらい年の春はるがくればと、のぞみをもって、おやかたさまからいただいたまめ豆やイモをわけあって、さむい冬ふゆを、しんぼうしてくらしたもんや。

そして、また春はるがきた。けれども、三島池みしまいけには、ひとしずくの水もたまらなんだ。

「春はるにさえなればと、きばってきたけど、今年ことしもだめか。」

「おらたち、死しねってことやろか。」

村人たちは、すっかり力ちからをおとしてしもうた。

そんなとき、だれかが、

「こうなったら、池いけの神かみさんに人柱ひとばしらをささげるしかない。」

と、小さくつぶやいた。みんなのむねは、どきんと大きくうった。人柱ひとばしらのことは、だれも気づかなんだわけではないが、人柱ひとばしらにえらばれるむすめのことをおもうと、かわいそうでいいだせなんだのや。

そのとき、

「おやかたさま、おねがいがございます。」

と、やさしいがきつぱりとした声こゑがした。

「おお、比夜叉御前ひやしごぜんか、なんじゃな。」

「どうか、わたしを三島池みしまいけの人柱ひとばしらにしてください。」

「な、なにをいうか。おまえは、若わかにとつて母ははともおもうだいじな人じゃ。ならぬ、それはならぬわ。」

おやかたさまは、きびしくいうた。

「おやかたさまは、心やさしいおかたです。村に食たべるものがなくなつたとき、あたらしい豆まめを村人たちにくださり、おやしきには、ふるい豆まめをのこされました。奉公人ほうこうにんのわたしたちにまで心をくばられ、ほんとうによくしてくださいまし

た。おやかたにおつとめにあがってからきょうの日まで、わたしはしあわせでございました。おやかたさまのお役にたてるのなら、わたしのいのちなど、おしくはごさいません。」

「比夜又御前、おまえは、まことにやさしい心のもち主じゃ。神もおまえのねがいは、かならずききとどけてくださるであろうのう。ああ、だからといって、おまえを人柱にたてるなどということは……。」

おやかたさまのことばは、とぎれてしもうた。村の人たちは、みな、なみだをながした。

「そんなになげかないでください。わたしは池の中で、みんなといっしょに生きています。」
御前の満足そうな顔は、うつくしかった。そして比夜又御前は、池の中にうめられていった。村の人たちは、なきながら手をあわせ、お経をとなえつづけた。

つぎの朝はやく、村の人らは、はた織りの音で目がさめた。

トントンカラリン トンカラリン

そら耳かとうたがいながら、池のはたまででてみると、

「あ、水、水や!!」

三島池は、まんまんと水をたたえている。いまのぼった太陽の光が、まっすぐに池にとどくと、水がきらりとひかった。

「御前さまのいのちの水や!!ありがたい、ありがたい。」

ながれでる水は、田や畑にくぼられ、人びとは、よろこびにあふれてはたらいいた。夏には青田がそよぎ、秋には米がたくさんとれた。それからは、池の水がかるようなことはなかったんや。

いまでも三島池の水ぎわに立つと、池の底から、うつくしいはた織りの音が、ひびいてくるということや。



(田中美智恵氏)

へんじょうが岩屋

本能寺の変で信長が敗れたので、長浜城に留守を守っていた秀吉の母と夫人は、追手をのがれて美濃へ逃げました。曲谷へさしかかった時は、もう日暮となっていました。

曲谷の長義は二人を案内して、起し又の上流へんじょうが岩屋へ二人をかくしました。ところで二人は「持萩中納言やすけ郷の侍女、世を忍ぶ身ゆえ他言されぬ様」と固くいましめたので、長義は村人とはかって追手から守り、白山権現に無事を祈りました。

やがて光秀が滅ぶと、秀吉は妻女をかくまったほうびとして東草野庄三郷の検地を許す書状を使者にもたせ、つづいて増田長守が使者として、ご公所、ご母堂の石像と、お盆に山盛りのまゆ形の黄金を、つづいて行基の石像とを書状とともに奉納しました。

毎年春の祭りには、この時の使者に変装したヨロイカブトの若武者と、陣笠袴姿の従者、たくさんのお侍、それに御母堂、御公所に扮した子供らが参加して大祭をもちあげました。戦後、刀・槍などがとりあげられたお祭の行事もなくなりました。石像は白山神社境内に今もおまつりされています。

峠の地藏さん

峠といっても、たかだか五〇メートルほどの峠ですが、片方は断崖絶壁碧くりだった琵琶の水が岩壁にござうと打ちよせ、上り下りの道はうっそうと繁る樹木で昼なお暗き難所で、わずか峠のてっぺんだけが琵琶の全景を一望におさめるよいところとなっております。

そこに小さな地藏堂があって、小さなお地藏さんがおまつりしてあります。昔から浜街道といつて、長浜と彦根を結ぶただ一つの道です。

旅人は上り道のつかれを地藏堂の前で一休みして峠を下るのが常でした。昼の明るいうちはよいが、吹き降りの闇夜の晩などは鼻をつままれても、わからぬほどの一寸先はくら闇で心細いことはこの上ありません。

その当時の磯は内湖を家族揃って舟渡して田圃の仕事に行つたものですから、彦根から来る呉服反物の商人も日暮から風呂じまいの時間になるのもいたし方ありません。時には真夜中となることもありました。

特別心細いときがあつても一本道のため峠を通らねば帰ることもできません。

そんな晩は峠にかかると、一メートルばかりの小坊主さんが、先になつてちよこちよこ道案内をして峠を下り、下つたところで姿が消えてしまうのです。誰いうこともなく峠のお地藏さんの仕業だとありがたく思うようになりました。

また小坊主さんに会わずとも、どこかでお守り下さっているのだと思うと心丈夫で安心して峠を越すことができました。

また松原のお浜御殿のはずれで追いはぎに会つたとか、墓場で妙な奴に出会つたとかいうことはたびたび聞きましたが、この峠で追いはぎに会つたということはついぞ一度も聞いたことはあ



りません。

あるとき、長浜の商人が彦根での商談が思わしくなく、夜おそくこの峠を通ることになり山の端にかかると、小坊主が先になり、とこと山道を行くので、さては磯山の狸がばけてでたものと、おじけついたが、この道を通らねば帰れぬので、こわごわ峠にかかると地藏堂の前で小坊主の姿が見えなくなり、さても不思議なこともあるものよと、夜どうして長浜に帰りました。

それから駄目だと思った商談もまとまり、商売もとんと拍子に繁昌したので、さては峠の地藏さんに会ってから運が向いて来たのだと思い、自分の家にお迎えして信仰したら一層商売繁昌するだろうと思いました。

ところが地藏さんは「私は今のところでせい一ぱいだからお前の家に来ることはできません」といったところで眼がさめ、今のは夢であったのかと、自分の愚かな考えを後悔して、せめてものお礼にと台座を作って、その上におまつりすることになりました。

世は移り変わり峠の下に湖岸道路がつき、交通量も日増しに増加する一方、昔の峠の道は通う人もなくなりました。

峠の地藏さんも今では下に降りて来て毎日交通安全のため、つくしていただいております。お地藏さんの前を通るたびに、行くときは「行って参ります。」帰りは「只今帰りました。」と口ぐせになり、バスの中でもひとり口に出てきます。

おとら池の伝説

昔、多賀の久徳村きゅうとくむらにある庄屋しょうやさんが住んでいました。夫婦ふうふ仲も良く円満えんまんで、そのうえ妻のおとらさんは絶世ぜっせいの美人びじんで気品きひんもあり、近郷近在きんきょうきんざいまで親したしまれていました。

ところが身みもって臨月りんげつになったある日のこと。主人しゅじんに「私がお産さんするときは、たとえあなたでも絶対ぜったい見ないでほしい」とたのみました。いよいよ出産しゅつぱんの日がきました。「見るな」といわれれば見たいのが人情にんじやう。まして妻のことでもあり、隣の部屋すまの隙間すきまよりのぞいて見ると、寢室しんしつのおとらさんが六畳一ぱいに大蛇だいじやとなり、子どもを生んでいるではありませんか。

この様子を見て驚き、今まで美しい妻だと思っていたのが人間ではなく蛇へびであったとおどろいてますと、お産を済ませた、おとらが申すには「私は人間世界にんげんせかいにすることができなくなりましたので、この家を去りますが、私にいたいときは霊仙山れいせんざんにある七角の池にいますから、この子が七つになるまでお育て下さい。七歳しちさいになったら七角の池まで連れてきて下さい」といって庄屋の家を立ち去り、途中お世話になった、入谷、今畑、落合(この村を霊仙三ヶ村とよぶ)へ挨拶あいさつにより、各々おのおのの部落おののへ櫛くし、かんざし、こうがいをお礼として与え、霊仙の七角の池へと立ち去りました。(このときの、くし、かんざし、こうがいは今なお前記の村の内の個人の宝として残っているとのこと)

庄屋がこの女の子の七つになったとき、その池のほとりに連れて行き、お母さんおははに会いに来ましたという、大蛇姿のおとらさんが姿を現わしたかと思うと、その子供と一緒に、池の中へ姿を消してしまったということです。

その後、この池を、おとら池おとらいけといって崇め地元久徳を初め霊仙三ヶ村と地元の樽ヶ畑は、毎年夏になると、土用見舞として、おとら池へ詣まったものです。



坂田金時考—西黒田風土記—

近江町舟崎と小一条町の郷境に諸頭山という山があつて、その尾根に登る所を「番所」(ばんふところ)と呼び、現在の位置に授乳地蔵を祀る小さな祠があり、多くのおまいりをする人がいます。この付近はつい先頃まで一方は山、もう一方は長い藪が続き、民家はなく昼なお薄気味悪い所でした。

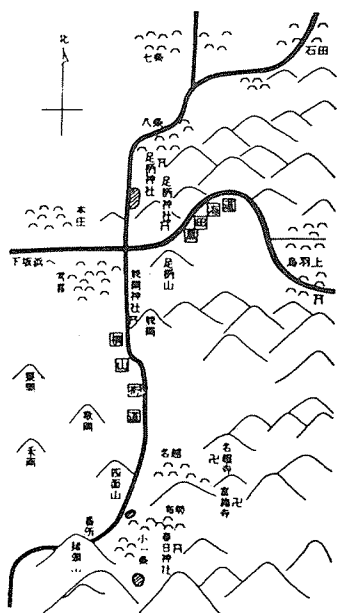
ところで源頼光の家臣で、四天王の一人にかぞえられた坂田の金時は、布勢郷に生まれて、ここで乳母に育てられたと言ひ伝えられ、「ばんふところ」と言うのは「姥が懐」のなまったものだと言われています。

幼名を金太郎と言つたこの少年は、このさびしい山里に乳母に育てられながら丸々と育ち、生き生きと遊びまわる怪童であつたそうな。

ある時は近くの鯉ヶ池に行つて大きな鯉を追いかけたりして遊んだと言われ、五月五日の子供の日に空をおよぐ鯉のぼりの鯉の背にまたがっている金太郎の姿は、この様をあらわしたものであるそうな。またある時は常喜村の熊岡や足柄山にわけ入つて、熊や猿や兎と遊んだり、相撲をとつたりしていたそうな。熊岡神社の縁起書の中に、この付近に大きな熊

が住んでいたことが記録されている事や、本庄町の芦柄神社の奉納相撲の歴史の古いことなど、金太郎の童話の背景が言い伝えられているようです。

やや長じた金太郎は、当時、この地に勢力のあつた息長家の村の刀匠のもとで働き、そのたくましい体と氣迫をもって大槌をふるっていたそうな。時あたかも平安後期、この地は名超寺、富施寺等、天台の法灯全盛を極めた時代、中央朝廷とも政治的、文化的な交流も盛んに行われて



いた土地柄でもありました。

天延四年（九七六）旧暦三月二十一日、上総守の人氣が満ちて上洛する源頼光が、黒田海道を西へ足柄山にさしかかると遙か南の山腹に紫雲のたなびくの見、あの麓には必ずすばらしい人がいるに違いないと、渡辺の源次綱を遣わしてさがさせたそう。折しも、坂田の七つの岡、そして布施・名越・小一条の横山一帯はおびただしい山つづじが紫や赤い花をつけ、実にみごとに眺めで、紫雲たなびく山里と頼光の眼に映ったのはこのためでありました。

思ったとおり、この山里に六十余歳の老婆と、童顔の二十歳になったばかりのたくましい青年を見つけたそう。頼光は、その非凡な姿かたちを認めると共に、坂田の地名をそのまま入れて坂田の金時と名づけて召しかかえることにしたそう。坂田の金時は頼光に召しかかえられた後は数々の手柄を立てたが、中でも正暦五年（九九四）伊吹山の悪い集団を征伐する折には、一方の旗頭となり、付近の地形をよく知っていたこともあって、一番乗りの大手柄を立てたそう。金時が生まれ育った坂田の地を荒す輩は、自分の手で征伐してやると意気込んで戦ったと言われています。

こうして、坂田の金時は先輩にあたる渡辺の綱、卜部季武、碓井貞光と共に、頼光の四天王の一員に数えられるまでになったそう。

寝牛の大岩

「母ちゃん！遊んでくるで」

と、家を出る子供に母親は必ず、こういいます。

「寝牛の大岩にさわるでないぞ。あのそばへは行かんこっちゃ」

と、これは北野のどこの家でも同じことをいって子供達に注意したものです。

親が子にと、代々言い伝えてきたことでもありました。これは、浅井町大字北野の北野天満宮境内に現存している大きな岩のことです。

この岩はちょうどいまから三百年ほど前、北野神社がおまつりされる以前に、村人たちが総がかりで奥山から持って帰ったのでした。牛の寝た姿にそっくりであったため、人呼んで寝牛の大岩といったのです。

重量約七百貫といわれ、村の所有地の一隅に安置されました。その後、ここに北野神社を造営して今日に及んでいます。

ところが、この岩は、たいへん意地の悪いことで評判です。

この寝牛の大岩にちょっとでも手を触れると、たちまち腹痛を起こしたり、ひどいになると気が狂ったりするので、村人にたいそう恐れられていました。

神罰を蒙むるというのです。

あるとき、悪戯坊主が親のいうことを聞かないで、その形に惹かれて、つい馬乗りをしたのです。ところがどうでしょう……。その子供は、案の定その場に卒倒し、死んでしまったということです。それからというもの、とくに母親たち



はいままでに倍して、「あのそばに行くでないぞ」「さわるでないぞ」と、子供たちに行ったということです。

この所に北野神社が造営されたのも、一つは神域として誰も手を出さないようにとの村人たちの思いつきであったのかもわかりません。

以来、その大岩に誰一人、いまだに手を触れた者はないといわれています。昔昔からの、苔むすままに目体をよこたわらせているのです。

虎御前と虎姫

中野山の南東のふもと、桃酢谷というところに、井筒という泉がありました。

その泉のほとりに、虎御前という、きだてのやさしい、世にも美しいお姫様が住んでいました。

あるとき、お姫様が旅の帰りみち、夜になったので、馬橋の近くに住んでいた、長者をたずね、一夜の宿をかりました。それが縁で、お姫様はそのおやしきに住むことになり、長者の妻となり、人もうらやむ、幸せな毎日を送っていました。そのうち、お姫様に赤ちゃんが生まれることになって、長者はいうまでもなく、村の人たちも、さぞ、かわいい赤ちゃんが生れるだろうと、待ち望んでいました。

ところが、お姫様は、十五ひきの小蛇をお生みになったのです。この日からお姫様は、人目を恥じて外へもお出になりませんでした。

ある月の明るい夜、自分の姿が池にうつつたのを見て、それが蛇身であることを知り、女性が淵（みせがふち）に身を投げてしまいました。

世々開長者はその後、十五ひきの蛇が、人の姿に成長したので一か所ずつの土地を与えました。

虎姫が、向い酢村、東中野、北大井、北大寺……など、みなで十五の村からできていたのは、そのためだそうです。女性が淵は、今の町立中野山遊園地の東のあたりだといえます。

中野山のむかしは、長尾山と呼んでいましたが、後の人が、姫をたたえて、虎御前山といい、明治二十二年四月、町村制が実施されたとき、虎御前姫のゆかりから、虎姫村としたといえます。

権兵衛穴のはなし

山本ヤンマー工場の西、若宮山の南山麓に権兵衛穴古墳があります。昔、山本に権兵衛という人がいて一儲けしようと考えて、古墳の中に大蛇がいると言って、柵を作り、囲いをして見せ物にしました。これが大変な人気で、見物客が続々と見に来ました。しかし、権兵衛さんは中を覗こうとするのを、「危い。危い」と言って抱きかかえて大蛇は見せませんでした。しかし、娯楽も無かった時代なので、人は増えるばかりで大繁昌でした。

山本の庄屋さんが、字役員に相談をして、これはお殿様に届け出をしないと、後日おとがめがあると悪いと全員で相談して、届けるべく身仕度をして家を出ようとしたとき、届け出の話聞いた権兵衛さんがビックリして、「実は、昨夜大蛇が残念ながら逃げました。もはや届出の必要が無くなりました」と庄屋さんに告げて、大蛇騒動も終わりました。その後、誰が言うとなく、

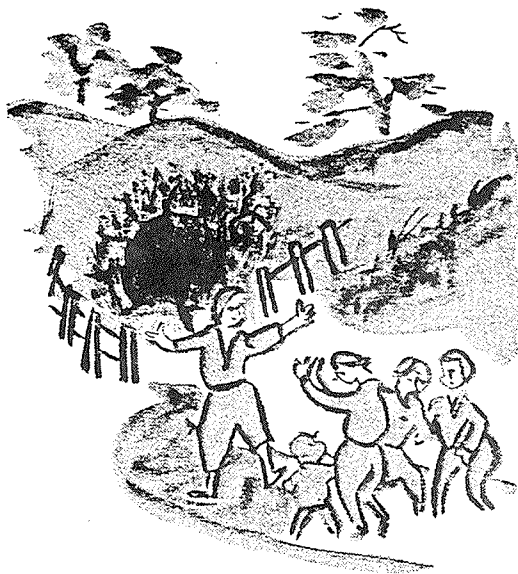
権兵衛穴には蛇がいたそうなの

権兵衛蛇げな嘘蛇げな

と言う落首一句で一件落着きました。それより、この古墳は権兵衛穴古墳と名付けられました。また、山麓の道に近い便利な所にあるので、山本城の警備や戦いにも利用され、兵士の隠れ場所としたり待機場所として利用されました。

近隣の若者やあまり良くない者が、お上の取締りを避けて賭博の場所として使用したこともあるようです。

戦中戦後は、この穴に甘藷を貯蔵した人もありました。そうしたた



めにか、穴は大変浅く成ってしまいました。昔ははしごでないと出入りはできなかつたのですが、今は、中学生にもなれば出入りできる浅さになっています。しかし、見に来る人は跡あとを絶たたず、杉林の中にある古墳に通ずる道には常に草は生えません。

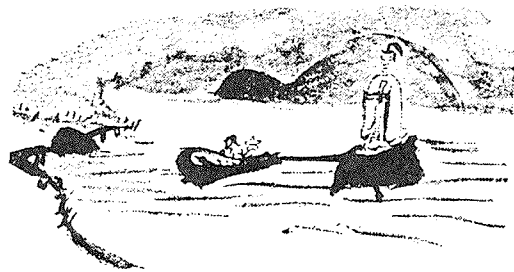
普通、古墳は聖域せいいきであるとか、崇りがあるとか庶民の近寄りがたいものがありますが、この権兵衛穴古墳は、庶民とよろこびや哀しみを共にしてきたユニークな古墳として親しまれて来ましたが、今後もそのような古墳であることを願っています。

島つなぎ

むかしむかしのことです。そのころの湖には、小島がぼつんとあるきりでした。この小島には明神様がお住まいでした。小島は湖のどこからもながめられましたので、湖を渡る小舟のよいめじるしにもなり、人々は小島の明神様とよんであがていました。ところが、ある夜、にわか大島が浮きあがってしまいました。小島の明神様は、すぐさまぐうっと腕をのばして、ただよう大島をつなぎとめられました。それから、魚たちが島かげにより集まったので里の漁師たちのだいじな漁場になっていました。

この大島には、姫神様がお住まいになっていました。その姫神様は、弥生はじめに、瀬田の竜神のもとへお渡りになるといわれていました。後には笹舟に乗られた姫神様を拝んだという里人もあらわれましたので、だれもがあがめて島へあがらないようにしていました。が、ずうっと後の世になつてある行者が、姫神様のお告げで、島に渡り祠をお創りしたということです。

それはある年の三月はじめの、おだやかな天気朝あけのころでした。早起きの漁師たちは、目を島にそいだまま浜に棒立ちになっていました。それもそのはず、島が分かれて流れているのです。しかもかなりの速さで南を指しています。あたふたと駆けつけた里長も、何度も何度も目をこするばかりでした。このまま、島が次々と流れだせば集まった魚も散り散りになり、やがては里人のくらしにもひびくにちがいありません。里長は、さっそくに里の長老たちを集めて相談をしました。しかし良い知恵も生まれません。みんな首をかしげたまま永い春の一日も重苦しく暮れかかりました。そのときです。湖のあたりから童のざわめく声がかきこえてきました。舟遊びでもしていたのでしょうか、「舟をしっかりとつないでおけや」かすかでしたが、誰の耳にもそう聞こえたかと思つたら、ふたたびものしずけさにかえりました。一人の長



老が、首をおこしはっとひざを叩いて申しました。「そうだ去年、島の竹がすっかり枯れたのではないか。瀬田へお渡りの姫神様が、笹舟も作れず乗り舟にこまられて、島を分けてお渡りになったのだろう。小島の明神様のお力でもそれをおとめすることができなかつたにちがいない」「小島の明神様につきなぎ綱をお渡ししてお願いしようではありませんか」と次老がいました。「竹がふたたびそだつまで、小舟を島かげにつないで、姫神様にさしあげましょう」と三老がいました。相談はきまりました。行司には初めて島に渡った行者の子孫にたのむことになりました。弥生三日、行者は里の若者たちと、島へ渡りました。姫神様へさしあげる小舟を島かげへつなぎました。やさしい里娘が、花かんざしを舟にたてました。若者たちは、行者の手助けをして、大島を小島にしっかりと綱をつなぎました。

そのとき、流れだした島は、瀬田川まで流れて、今の唐橋の中島になったといわれています。島の竹は、前よりもましてしげりました。それでいつとはなしに竹生島と書かれるようになりました。島つなぎはそれからずっと弥生三日に子孫の手で行われてきました。いつからか小舟は餅舟にかわりましたが、花かんざしはかならず添えられていたということです。

ひとばしら

井口の日吉神社の東に、小さなお宮さんがあります。このお宮さんは、はじめ、高時川地先にまつられていたのですが、後になって、今の場所に移されたそうです。

このお宮さんは「井の明神」といって、私たち農村にとって、一ばんたいせつなみずの神さまです。

井の明神には、大へん珍しいものがまつられてあるそうです。それは、昔の女の人たちが使った、櫛と笄だということです。なぜこんなものがおまつりしてあるのでしょうか？ それには、こんなむかしばなしが語りつがれています。

「おうーっ、また、水がすいこまれるぞい」

「また、穴があいたんじゃ」

「こんどの穴は、前よりも大きいぞい」

つかれきった村人たちは、もっこやかかけやをなげ捨てて、水の行方を見守っていました。水取口に、ポツカリあいた大穴は、埋めても埋めても、水を通すたびに、村人の苦心をあざけるかのように、水をすいこんでしまつて、せっかく造つた用水川には一滴の水も流れません。十二ヶ村の総力をあげて立てた大井の井ぜきも、水が引けなければ、たんぼは枯れて、ひとつぶのお米もとれないのです。

「こりゃきつと、龍神さまが、おこつていなさるんじゃ」

「そうじゃ、そうじゃ。おそろしいことじゃ」

「だれか、悪いことをしたもんがいるからじゃ」

村人たちは、おそろしげにささやき合いながら、カラカラにかわいたたんぼ道を、力なくトボトボと帰っていきました。

井口をはじめとして、富永の庄の水利を支配する井口弾正も、この大穴をふさぐことについては、日夜頭をいためていました。

ある朝、村の大庄屋孫兵衛が、弾正の館やかたへ参上して、

「実は、昨夜たいへんな夢をみました。私の夢枕ゆめまくらに、岩滝大神いわたきおおかみがお立ちになりまして、『妙齡みょうれいの婦人を、人身御供ひとみごころにすれば、水は流れるであろう』といって、そのまま消えてしまわれました。まことにふしぎな夢でございました」

と申しあげているところへ、もう一人の大庄屋八兵衛が、同じ夢のお告げを報告に来ましたので、弾正もそのお告げの重大さに驚いて、三人でいろいろとそうだんをしました。が、人身御供というのは、その大きな穴へ身を投げて、竜神さまに命をささげることであるだけに、だれそれと名指しなざしをするわけにはいくまい、ということになって、三人とも、めったにいいだすこともできず、ただ思案にくれていました。

弾正には、何人かの美しい娘さんがありました。そのうちの一人が、このはなしをとなりの部屋で聞いていました。心のやさしい娘さんは、

「わたし一人がひとばしらにたてば、龍神さまが水を通してくださるのなら、よろこんでまいりましょう」

と、父にも、母にも、だれにも言わないで、その夜、こっそりと家をぬけだして、川原の水取口の大きな穴のところまでやってまいりますと、話に聞いたとおりの巨大な穴が、深く深く地獄にまでつづいているかと思われる、大きな口を見せていました。

南無、意波大岐いわたきの竜神さま、この穴をふさいで水を通させたまえ

と、高らかに祈りながら、穴に身を投げようとした時、

「ゴゴッ」

と山鳴りがして、山上から大岩石がころがり落ちたかと思うと、たちまち、大穴の口をふさいでしまいました。水は、み



るみる満水となり、取入口から用水川へ、とうとうと流れ始めました。

「水がきたぞーっ」

「たんぼが、助かったぞーっ」

喜びいさんだ村人たちは、つかれも忘れてかけつけました。なんと、巨大な石がすっぽりと、穴をふさいでいるではありませんか。

「龍神さまじゃ」

「龍神さまが、石をころがして下さったのじゃ」

「ありがたいことじゃ」

青々と勢をもり返したたんぼをながめて、村人たちは、手の舞い、足のふむところを知らずに喜んでいたのですが、やがて、その岩の上に、何か白いものが置いてあることに気がつきました。おそろおそろ

手にとってみますと、白い紙につつまれた櫛くしと笄こうがいであつたのです。

「あつ、この櫛はたしか、弾正さまの娘さまが持っていなかつた櫛じゃ」

「それに、この笄にも、見おぼえがある。まちがいなく、弾正さまのお姫さまの笄じゃ」

どうして、それがここに……と、いぶかっている村人たちのところへ、息せき切って、かけつけた大庄屋二人は、

「あつ」

と、息をのんでしまいました。

「実は、娘さまがお一人、今朝になって、どこにもいなさらんのじゃ」

「弾正さまも、えろうご心配なのじゃ」

櫛と笄を手にとった孫兵衛は、ハッと気がついて、八兵衛の顔を見ました。八兵衛もまた、孫兵衛の顔を見ました。二人の視線は、ヒタと出合ったまま、しばらくはものもいえずに、立ちつくしていました。

やがて二人は、地面にひざまずいて、岩に向かい、櫛と笄をおしただきながら、村人たちに告げました。

「皆の衆、どうか坐ってください。そして、手を合わせて、いっしょにおがんでください。弾正さまの娘さまが、龍神さまのお告げを受けて、人柱にたってくださいましたのじゃ」

「娘さまは、もう今ごろは、龍神さまの御殿から、わしらの喜んでいる姿を、じっと見てござらっしゃるぞ」

村人は、はじめて知った尊い人柱の靈験と、娘さまのやさしい心にうたれて、だれひとり、立っている者はいませんでした。岩をめぐって、じっと坐りこんだまま、ありがた涙にくれて、いつまでも合掌していました。

(井口氏)

白鳥伝説と大音糸

広く知られた羽衣伝説の中でもよくまとまったものも古い記録といわれ『近江風土記』に収録されている説話は次のごとくです。

もの知りのおじいさんの伝えていうには、近江の国伊香の郡、与胡の郷、伊香の小江のことです。その小江は郷の南に在りました。その小江に天女が八人白鳥となって水浴をしていました。そのとき伊香刀美という人が西の山からそれを見て、これは神々しい鳥だ、もしや神人ではないかと思つて近づいてみるとやはり神人でした。その天女の美しさにみせられた伊香刀美は白い犬をやって天女の羽衣をぬすませました。羽衣をとられた天女は、他の七人が天へ帰つてしまつたあとも帰ることができず地民となつてしまいました。伊香刀美は天女と夫婦となりここに住みつき四人の子供をうみました。兄の名は意美志留弟は那志登美、娘の名は伊是理比売、つぎの娘が奈是理比売でした。彼らは伊香連の先祖でした。後に天女は羽衣を探しあてて天へ帰つてしまいました。この伝説に出てくる伊香刀美が当神社の御祭神伊香津臣命であろうと推定されると同時にこの羽衣伝説が大音、西山地区に伝統産業としてその名が高い、養蚕、生糸の技術をもつ人々のこの地方への言いつたえを意味するとも考えられます。そして今も賤ヶ岳から流れる清流でつむがれた良質の糸は三味糸や琴糸として特に珍重され全国に広く知られています。

天女の羽衣（帝王編年紀より）

この話は昔昔その昔古い古い頃の話です。

年老いたおじいさんのお話によると、近江の国の伊香の郡、（今の伊香郡）余呉の郷さとの南の方に伊香の大江おえというところがありました。ここへ天の八人の乙女おとめが白鳥となって降りてきました。湖のほとりにおりると、白鳥はたちまち美しい乙女の姿にかわり、着ていた羽衣をぬぎすて湖の南の浜辺でわれ先に、楽しそうに水浴をはじめました。

このとき、西の山の方から、伊香刀美いかとみという男がこれをじっと見ていましたが、頭の上を飛んで行く白鳥を見て、どうもあの白鳥の形は体も大きく少し変わっているのでへんだなと思いました。もしかしたらこれが話に聞いている天女かも知れないと、後をつけてきました。

よく見ると、それは思った通り天女でした。天女たちは見られているのも知らなくて、楽しそうに語らいつながら、水にもぐったりして、遊びたわむれていました。

伊香刀美は、天女たちのあどけない汚れを知らない美しい姿に強く心を引かれ、立去ることができません。遂に意を決し、つれていた白犬をつかって、八人の天女の中の一妹の羽衣を盗ませました。この音に気づいた、天女たちは一斉にかけあがり、羽衣を着ると空に飛び去りました。ところが一番下の妹は、一生けんめいであたりを捜しましたが、どうしても羽衣が見つかりません。

さがしあぐねた一番下の妹の天女は、空を仰いで天へ帰ることもできなくなり、その場に座ると泣き出してしまいました。

伊香刀美も哀れに思いましたが、姉たちはもう遠くへ飛び去り姿も見えないので、一人で飛び立たせることも案じられ、家につれ帰りました。

この天女の水浴していた浜を、神浦といっています。残っています。

その後、伊香刀美は天女を妻として一緒に暮らしました。そのうちに二男二女の四人の子供が生まれました。兄を意美志留、弟を那志等美、姉を伊是理比咩、妹を奈是理比売と名づけました。母の天女はその後、伊香刀美が隠していた羽衣を見つけ出し、それを着ると再び天に飛び去ってしまいました。

その後、この一族こそ伊香郡を開拓し、此の地に栄えた伊香連の祖先と云われています。いま伊香郡の総社である伊香具神社の祭神である伊香津臣の命こそ伊香刀美のことであり、木之本の意富良神社や、下余呉の呼弥神社の祭神になっている臣知人命、梨迹臣命こそ意美志留、那志等美のことだと伝えられています。

堀止地蔵

昔、平清盛はこの辺を平定^{へいで}して「琵琶湖の水をからからにしたら、面白いやろうなあ。」言うて、ここ掘るともう向う敦賀の坂落しじゃ。こいつは面白いぞ。琵琶湖の水干そかと言うてやりかけたけれども、さあ、いくら掘っても掘っても大きな石がどんごろどんごろ出てくるんですわ。だんだん掘らあったけれど、大きな石につき当たってその石を石屋さん
が矢でもって、ずっと掘っていったら石から血がでた。えらいこっちゃ、それでもうそれから気持ち悪がって、その石を
どんなもんじゃひっくり返してみようかってひっくり返してみたら、片側にお地蔵のお姿が彫れてあったということなん
や。「これはもったいないこっちゃ」言うて、むこうにお堂を建ててお飾りしてる。私も地元やから何回も参ってますが、
そのお地蔵さんは塩水が好きじゃと言うけど、琵琶湖の水はありますけど、塩水はないから塩をもって背中へ塗り
ますが。

上田守三郎氏

湖西ブロック

朽木村

「白王権現」

白王権現

むかしむかし犬丸というところに、侍筋(士族)の家があった。この家の息子は、ある日、御領主様のお供をして江戸へ旅に出たそう。家には若い嫁ごととしよりが残っていたが、嫁ごは、来る日も来る日もしゅうとに仕えて働き、何としても長い夫の留守は淋しい思いの毎日だった。

そのうちにふとしたことから嫁ごは村の若い衆と仲よくなって赤ちゃんが出来てしまった。しゅうとは、さっそく嫁ごのことをあることないこと息子に知らせたそう。そしてきつと息子は怒った便りをくすやろう、憎い嫁をどうしてやろうと思いつきながら息子の便りを待ったそう。

ところが、待ちに待った息子の便りは、「でけた事は仕方がない、わしがいぬまでそのままにしておいてくれ、無事に赤子を産ませてやってくれ。」と書いてあったそう。その便りを火にくべてしまおうたそう。そして、「江戸の息子からの便りにはそんな恥知らずな嫁は直ぐに殺してくれ」というて来た嫁ごに言つて直ぐに殺して川向うの山に埋めて墓を建てたそう。

それとも知らずに江戸から息子が帰つて来た。嫁に早よう逢いとうて、本当の事を知りたいと急いで帰つて来たが、嫁ごの姿が見当らなかったのでどこへ行ったとたずねてみると、嫁は、病気で死んでしまったので向いの山に埋めたと聞かされた。息子は悲しんで、江戸のみやげに買って来た帯を持ってその墓の前に来ると涙がポロポロとこみあげてきて「動け五輪よ、もの言え、墓よ、江戸のみやげに帯とらそ。」と言いつつ泣いたそう。すると墓の中から嫁のかほそい声が出て、「江戸のみやげの帯はほしくないがこの姿を見ておくれ。」と言つと、ごとんとんと墓石を動かして長い長い蛇となつて出てきた。そしてその大蛇は道を横切り白い石を枕にしていつまでも動こうとしなかつたそう。犬丸の人達は道も通れず困つてしまつた。そこでみんなが相談のうえ、大蛇に「大蛇よ、天神さんとしておまつりするからどうか身をひいて

「くださいな。」と頼んだそうなの。大蛇は、しっぽから三尺さんじやく（約一米メートル）ずつその墓の中へ戻って行ったそうなの。それから約東どおり、天神さんとしてまつたそうなの。ところが、犬丸では、たびたび火事かじがおきて村は焼けるので、不思議なことやというようになって、修験者しゆげんじやにみてもろたら、大蛇が墓から天神さんに行くのに犬丸の村がじゃまになるんで火を吹いて焼いて道をつけてると言う事やった。

犬丸では、これはどもならんと小さい祠ほこらを建てて、大蛇が枕まくらにしていた白い石を御神体ごしんたいにして、お祀りまつしたそうなの。これが犬丸の白玉権現しらたまごんげんさんとなったそうなの。それから毎年十月十日まいとしじふにちに、米やら、小豆あずきをもちよって、村の人々が赤飯せきはんの握りにぎ飯めしをいただいて、お祀りまつをしていると言うお話じゃった。